

休校中どうしてる？

砂場で街を造り上げた山村藍子さん(右)と
福田愛実さん



新型コロナ 対策

新型コロナウイルスの感染の広がりを防ぐために始まった全国一斉休校。毎小読者のみなさんにすこし方を募集したところ、ユニークなすこし方が報告されました。計画的に自習などに取り組んでいる姿も浮かびます。

みんなのすこし方を紹介

本気で砂遊び

三重県津市の小学4年、山村藍子さんは、学校が休校になったのに加え、習いごとにも休みになり、近くにある図書館や博物館も休館になってしまいました。友達と「少しでも体を動かせるように、午前中は公園に集合する」と約束しました。

お母さんの智子さんによると、藍子さんは砂場で堅穴式住居(縄文時代から造られた住まい)を造ることに挑み始めました。午前中に作業して、お昼ご飯を食べ、午後

も穴掘りをしました。古墳も造ろうとしましたが、難しかったため山に変更。畑や橋のほか、ボール遊びの人たちから守るために城壁も造りました。

さらに砂場は進化を続けていくそうです。智子さんは「小学校も高学年になってからの、本気の砂遊び。私の想像を超えて、豊かな時間に思えました」とおどろきつつ「娘たち以外にも、感染しないよう配慮し制限された範囲の中で、大人の想像を超えた面白いことをしている小学生がいるんじゃないか」と記しました。

アプリで生け花教室

長野県松本市の小学3年、荒井結人さんは、午前中に学校の春休み帳やドリ



引き続き募集中

学校が休みになった場合、自宅や学童保育でどうすごしていますか。また、新型コロナウイルスについて思うことがあれば、書いて送ってください。住所、学年、名前(ふりがなも)、電話番号を書いて、〒100-8051(住所はいりません)毎日小学生新聞編集部「休校」係まで、またはメール(maishou@mainichi.co.jp)まで。できれば写真もつけてください。紙面で紹介することもあります。



頭をパワーアップ

大阪府茨木市の小学5年の双子の兄弟、佐々木快晴さんと蒼真さんは、その名も「『脳みそゴリラ』化計画」に取り組んでいます。午前中に30分ずつ、国語、算数、社会、理科の時間にあて、お昼ご飯の後は、作文に30分、英語に15分、おやつを食べて、30分のウォーキングという時間割を作りました。学校の宿題が少なかつたため、算数や社会については、お父さんとお母さんが手分けをしてプリントを作るなどしてサポートしています。



頭も体もパワーアップするのが計画のねらいで、お母さんの有希子さんは「時間割を決めた方が、何もないより落ち着いてすごせる」と言います。これまで順調にこなしているそうです。



きょうだい 兄弟の気持ち
5面

3面に 6さいからの ニュース

休校中どうしてる? 2面

みんなのすごし方

日本語どんぶらこ 4面

きへん、ごんべん

留学のススメ 6面

ペルー



震災時に発行した学校新聞「海よ光れ」を手にする大川海成さん

震災直後

避難所の学校で配布

被災者を元気に



中

東北地方の沿岸部に位置する岩手県山田町は、2011年3月11日の東日本大震災による津波で大きな被害にあいました。6年生が卒業を間近にひかえていた町立大沢小学校は、避難所となりました。当時、児童会執行部だった大川海成さん(21)ら4人は、復興への思いやボランティアへの感謝をつづった新聞を作りました。

大川さんが6年生の時、大沢小の学校新聞「海よ光れ」は第60回全国小・中学校・PTA新聞コンクールで名誉大賞を受賞しました。東京で行われた表彰式に出席した約1週間後、東日本大震災が起きました。

津波が町をおそいました。大川さんは津波でおいじさん、おばあさん、おじさんを亡くし、家も流されました。小学校で数日間すごし、仮設住宅ができるまで親戚の家に身を寄せました。

「みんなで復興に向かってがんばろうと伝えたかった。震災や避難所の状況を形に残し、支援への感謝も伝えようと思いました。9年がたった今、大川さんはそう振り返ります。新聞記者にあこがれていましたが、「災害があった時に現場に行き、人を助ける仕事をしたい」と思い、警察官になりました。大沢小の閉校とともに学校新聞も終刊となり、大川さんは「海よ光れ」は大沢小と地域の人々をつないでいました。閉校はさびしいけれど、新しい学校でも新聞づくりを引き継いでほしい」と願っています。



津波で流された自宅の跡に立つ大川海成さんと兄の海渡さん。岩手県山田町で2011年4月

切り替えました。大川さんはトップ記事を担当し、「負けるなよみがえれ 大沢の海よ光れ」と大きな見出しをつけました。記事には「がれきの片付けが進みました」「大沢の町も復興に向かってどんどん進んでいます」「私達にもできることがあります」などと書きました。完成した新聞は4月19日の始業式に、子どもや避難している人たちに配りました。

「そなえよ つねに」。これはボーイスカウトのモットーとして有名な言葉です。日本では昔から、「災害への備え」が重視されてきました。災害から身を守るために私たちがなすべき準備とは、何なのでしょう。



十津川村の小学校で、震災の体験などを語る佐々木さん(2月25日)

震災の体験 全国へ

岩手県釜石市の佐々木守さん(65)は2月25日、自宅から800m離れた奈良十津川村の小学校に講演に来ていました。釜石市は東日本大震災で、1000人以上の死者・行方不明者を出しました。中には、避難所に指定されていない施設に逃げ込み、津波の被害に遭った人もいます。佐々木さんは当時、市の防災責任者でした。「二度と同じ失敗をくり返してはいけない」との思いで、全国で講演を続けています。

佐々木さんの体験談を聞いた村立十津川第二小学校の6年生、玉置龍之介さん(11)は「これまで学校の防災訓練はあまり役に立たないと思っていたけれど、やっぱり事前の備えが大切だと感じたと話していました」。

家族で備えよう



イラスト 榎本礼子

自宅キャンプで防災チェック

災害に備えるために、具体的に何をすればいいの? 危機管理アドバイザーの国崎信江さんに聞きました。

皆さんにすすめているのは、週末を利用して、水道やガス、電気などを止めて、自宅キャンプをすることです。被災の疑似体験になり、本当に必要な防災用品が把握できるからです。また、それぞれの家庭で、災

害が起きた時の①連絡方法②待ち合わせ場所③両親が閉じ込められた時に、誰に助けを求めようか……などを書き記し、家族全員が持っておくことも役立ちます。

まずは防災に関する本やマンガを3冊ほど読み、家族みんなで覚えてみてください。近所の防災センターなどに行き、地震の揺れを体験しながら防災について学ぶことも大切です。

次の大地震は南海トラフ?

今、日本で最も心配されているのは、南海トラフ(海溝)で起こる大地震です。30年以内に70~80%の確率で起きると予測されています。特に心配されているのは津波です。近畿・四国の太平洋側の地域で津波が発生すると考えられていて、高知県黒潮町では、国内で最も高い34mの津波に見舞われるという想定があります。政府の想定では、南海トラフ地震では最悪の場合、死者・行方不明者は23万1000人、全壊する建物は約209万4000棟とされています。

自治体の「ハザードマップ」で、家や学校近くの危険な場所を確認してみよう。